

槍ヶ岳の開山 — 播隆上人

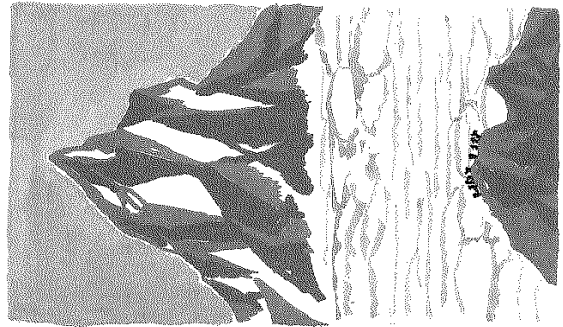
今、播隆と十数人の村人は、笠ヶ岳の頂に立っていた。だれもおし黙り、目だけきらきら光らせて立ちつくしていた。

目の前には、限りなく大きく深い自然の姿があった。下界では気付くこともなかった世界である。西に傾いた陽光の中に、北には立山連峰が、西には白山が、ゆう然と雲の上に浮かんでいた。やがて、深い静けさの中、日は西の雲海にかくれようと、山々は薄すみをひいたように、ひとかたまりになり始めていた。と、そのとき、その静けさを引き裂くように、一人の村人が叫んだ。

「見よ、見よ。雲の中に仏様が。」

皆、いつせいに目を走らせた。そこには、白、赤、紫の大きな光の輪が雲の上に浮かび、その中に、たしかに、金色の仏の姿とも見える影が浮かび上がっていた。

(この現象は、今ではブロッケンのおうかい妖怪と呼ばれ、高い山で太陽を背にして立つ人の影を前方の雲や霧に映す自然の現象であるが、当時の村人はそのことを知るはずもなかった。)



「ああ、ありがたや。」

皆、思わずその場に座り込み、涙を流して伏し拝んだ。

少し下った岩屋で夜を明かした一行は、次の朝、再び御来光を拝みに頂に立った。雲海は刻々と色を変え、やがて姿を見せる朝の太陽。折り重なった山々は、次第にそれぞれの輪かくを見せ始めた。突然、きのうは雲の間に姿をかくしていた、荒々しい岩ばかりの峰が浮かび上がってきた。それはひときわ高く天に向かっていた。

播隆は息をのんだ。そして、ふるえる胸を押さえながらその山を見つめていた。

「槍ヶ岳だ。」

誰かが叫んだ。播隆は身じろぎもしなかった。

槍ヶ岳を下りた播隆の胸には、言葉では表すことのできないあのふるえが、くつきりと残っていた。そこには、知らない間に自分ほどえらい者はないと思いい、日々、小さなことに争い嘆き、富や権力を求めている人間の心を、一瞬に打ちたく何かがあった。峰々を抜いてそそり立つ槍ヶ岳の姿は、まさに神秘そのものだった。播隆は、なんとしても、あの槍ヶ岳の頂に立ちたいと思いにかられた。

播隆は、行動を開始した。だが、その試みは、予想したよりはるかに厳しかった。

そこらあたりの山々にくわしい村人、中田又重郎を案内人として少し奥へ入ると、もう道もない原生の林であった。背たけほどある笹やぶを分け、行く手をさえぎる枝を払い、倒れた木々をのり越えて歩む一步一步だった。やつとの思いでそこを抜けると、次には、厳しい岩山とのたたかいが待っていた。雪の残る急斜面を、まるで、はいつくばるように登った。播隆の手足には、いたるところに血がにじみ、その歩みは次第におそくなっていった。しかし、彼の心は、ますます燃えふくらんでいた。この槍ヶ岳の頂に立てば、きっと、何かが見える、何かが見つめると思った。

だが、それを目前にしたところで、二人の歩みは完全に止まった。鋭くどがった頂に至る百間あまりが、切り立った岩壁だったのだ。何ものをも寄せつけない岩壁と飲む水もなく凍えるほどの夜の寒気、そして、疲れきった体。ついに播隆は、きつとまた来ることを心に決め、引き返さざるを得なかった。

それから二年。今、播隆は、霧の間に見えがくれする槍ヶ岳の頂をとらえようとしていた。

案内人の又重郎が先に立ち、二人は腰を荒なわで結び合い、そそり立つ岩壁

に向かっていった。岩の割れ目に指をかけ体を持ち上げる。わずかに突き出たところがあれば足場とする。全く手がかりの無い所は、綱を岩にひっかけ身を引き上げる。そんな作業のくり返しであった。上に登るより、横へ横へと道を求め、むだな動きをすることの多い歩みだった。いくつかの岩石が、その身をかすめてころがり落ちていった。こんな必死の行動を始めてから、どれほどの時間がたったのだろうか。最後に残る大岩をやつとの思いでよじ登ると、そこが、夢にまで見た槍ヶ岳の頂だった。

播隆と又重郎は、その場にくたくと座り込み、しばしばう然としていた。どつとふき出した汗は、足もとから吹き上げる風に飛び散った。ふと、我にかえった二人の目に、まわりの世界が一気に飛び込んできた。限りなく広がる天空の下に、山々がまるで槍ヶ岳に付き従うかのように、その頭を並べていた。頂に座る二人は、その景観の荘厳さに、押しつぶされんばかりであった。

播隆は、思わず立ち上がった。そして、かつて笠ヶ岳で味わった胸のふるえが、より大きく広がるのを感じ続けていた。

後に、彼は死の直前まで、この切り立つ岸壁に鉄鎖^{てつそ}をかけ、誰もが登れる道を開くことに全力を傾けるのであった。



出典 岐阜県教育委員会 郷土の資料 「郷土史研究にうちこむ」
(平成十三年十一月)